

平成 22 年 6 月 16 日現在

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007～2009

課題番号：19500888

研究課題名 (和文) 中国沿海部におけるグローバル都市地域の内部構造と対外連携

研究課題名 (英文) Internal structure and external cooperation of global city-regions in coastal China

研究代表者

小野寺 淳 (ONODERA JUN)

横浜市立大学・大学院都市文化研究科・教授

研究者番号：50292206

研究成果の概要 (和文)：

変化が著しい現代中国の都市空間をよく理解するためには、既存の行政区画を前提とせず、都市内部の空間構造の再編から対外的な連携関係の構築までを、統合的にかつ動的に考察することが不可欠である。このような問題意識に基づき、近年活発に議論されている「グローバル都市地域」の論点を参照しながら、中国における新しい都市空間の形成を実証的に検討した。

研究成果の概要 (英文)：

In order to understand changing urban space in contemporary China, it is inevitable to consider internal urban spatial reconstruction as well as the formation of external cooperative relations, beyond existing administrative divisions, from the integrated and dynamic viewpoint. Within the framework of such conception, reviewing recent lively discussion concerning “global city-regions”, this research has examined the new formation of urban space in China on basis of fieldwork.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：地理学

科研費の分科・細目：地理学

キーワード：中国、沿海部、グローバル都市地域、空間構造、対外連携

1. 研究開始当初の背景

本研究者はこれまで中国の都市の空間構造に強い関心を寄せてきた。

(1) 広域的な都市化のメカニズム

博士論文では、モンsoonアジアにおいて“desakota”として注目された広域的な都市化現象に関して、中国南部の珠江デルタ地域を事例に考察を行った。香港を拠点として大規模に流入する外国資本、四川省をはじめとする内陸部の農村からの大量の出稼ぎ労働者、そして集団所有地を利用して資本を蓄積する地元の農村コミュニティという異なる主体の作用を関連付けながら分析することを通じて、広域的な都市化のメカニズムを説明した。

(2) 中国の都市空間構造を規定する要因

中国の内陸部の都市を対象とした研究では、都市形成が計画経済、市場経済、あるいは慣習経済のどのシステムに従って進行するかによって、都市の空間構造が規定されることを明らかにした。沿海部の都市を対象とした研究では、急速な都市空間の再編に対していかに外国資本が影響を及ぼしているかを論じた。

(3) 本研究の着想

これまでの一連の研究を経て考えることは、郊外や都市間の農村部を含み込むようにして展開する広域的な都市化と、都市内部の市街地における空間再編とは、偶然に並行している現象ではないということである。双方はいくつかの規定要因のもとに相互に関連しており、むしろ有機的に統合された都市地域として全体を把握する必要があるのではないか。そしてそのような都市地域が一つの主体としてグローバル社会・経済の中で重要

な役割を果たすようになってきているのではないだろうか。以上のような研究の経緯と着想から、中国をフィールドにした「グローバル都市地域」の研究を計画するに至った。

2. 研究の目的

中国沿海部における「グローバル都市地域」の空間構造を北京、上海、福建、広東、浙江などの事例研究から実証的に明らかにすることを本研究の目的とした。

本研究は現地調査に基づいた研究である。また、現地の優れた地理学研究者の協力を得て、実質的な共同研究としての成果を上げることを目指した。ただ単に調査の実務上の補助を受けるだけではなく、研究内容についても議論を交わした。

土地利用権の移転や、農家における労働力の析出にまで踏み込んだ詳細な現地調査を行うが、そうして得られた調査結果を個別の事例の記述に終わらせることなく、グローバル都市地域の形成というより大きな空間スケールの文脈に位置付けて考察した。さらに、本研究の成果を、中国における都市形成メカニズムの解明というより包括的な研究テーマに結びつけることを志向した。

3. 研究の方法

具体的には、それぞれの事例研究において、以下の3点に着目した。

(1) 都市地域の中心市街地の空間構造

土地利用計画、都市計画、その他の政府資料から、都市地域の現状と当局の展望を把握した。また、地誌、統計、地図、地元発行の新聞記事などの資料から、都市機能の現状と変化を把握した。さらに、代表的な都市再開

発プロジェクトとその周辺街区の都市景観変容の過程を追った。具体的には、その変化を促した多様な経済主体の意図と資金流動の実態、土地の使用権や建物の所有権の変動状況、旧住民と新住民の社会的属性や空間的な分布、を明らかにすることを目指した。

(2) 都市地域の中心市街地と縁辺の中小都市や農山漁村との関係

地誌や統計などの資料から、労働力流動や産業構造等の動向を把握した。また、特定の農村を選び出し、労働力の析出の過程を追った。具体的には、労働力の産業間や地域間の流動状況、農家経済における労働力利用の実態、域外への労働力送出のシステム、を明らかにすることを目指した。

(3) 都市地域全体の空間構造

上述の(1)と(2)の連関性を検討し、さらに、都市地域の対外的な関係を、特に都市機能や労働力流動の分析を踏まえて検討した。そして、3つの事例研究の結果を比較検討し、中国沿海部の都市地域の状況を総括した。

4. 研究成果

グローバルな社会経済的な情勢に敏感に反応して、自らの内部構造を再編し、対外的にはオープンな関係を構築するような、グローバル都市地域と呼ぶにふさわしいタイプの空間が、中国の沿海部に現出していると言えるのではないか。

(1) 北京

北京の中関村の事例からは、産業集積の形成が知的資源の集中を契機としながらも、政策的な関与が重要な役割を果たしてきたことがわかる。サイエンスパークの建設やインキュベーターの整備の過程がそのことを示している。そしてもう一点、現代の産業集積はグローバルな関係性の中で理解すべきであることも、中関村の事例はよく示している。

留学帰国者のような国際的な人材による起業が産業集積の大切な要素となり、国際的な連携に基づいたサポートが不可欠となっている。そして多国籍企業はそうした産業集積地の優位性を立地戦略の中で常に見極めようとしている。

オリンピック開催が北京の都市構造を刷新するための絶好の機会になったことは確かである。オリンピック競技施設の建設ばかりでなく、主要道路や軌道交通が急速に伸張し、その他のインフラや公共施設の整備も精力的に進められた。しかし、オリンピックの先まで見据えた時、とりわけ大気汚染や水不足などの環境問題になかなか解決の道筋が見えない中で、より大胆な都市構造の再編を検討する必要があるのではないか。また、中国が経済発展とともに世界経済の中に組み込まれてゆく中で、北京という都市がその地位をどのように高めてゆくのが問われている。そうするためには、自らの空間構造を再編することの他に、中国国内のそしてアジアの諸都市とどのような関係を取り結んでゆくかがもう一つの重要な課題となろう。

(2) 上海

上海においては、大量生産の機能は遠郊および長江デルタ地域の各地へ分散していたが、近郊に位置するいくつかの開発区には、研究開発や経営管理といったより高次の機能が集積しつつある。また、それらの機能に従事する高所得者向けの住宅開発が近郊において活発化している。

上海の本格的な都市開発は、華南の諸都市などよりも遅れて開始された。浦西地区の再開発は1980年代中盤に着手されたが、浦東地区の大規模開発は1990年代に入ってからであり、大量の外国資本が上海へ急激に流入し始めたことと時期を一にしている。この時期、上海でも土地制度改革が進められて、土

地使用权の有償譲渡が行われるようになった。当初その譲渡先はもっぱら外国資本であり、譲渡金を利用した都市開発の原動力が外資にあったと言えるだろう。ただし、近年は国内資本向けの譲渡が増加している。

かつて租界時代に東アジアの金融・貿易の中心地となったのは黄浦江に面した外灘であったが、今では対岸の陸家嘴金融貿易区の高層ビル群に内外の大企業が生産・販売に関わる経営管理機能を集中させている。外高橋保税区や金橋輸出加工区には外資系企業の生産拠点が数多く立地している一方で、張江ハイテク園区や漕河涇ニューテック開発区などにおける研究開発機能の集積が目される。住宅以外の建物について建築面積の変化を見ると、1990年代のオフィスの急増ぶりが目を引く。

長江デルタ地域そして中国全体を後背地とする上海が、市場経済システムへ回帰する中で、計画経済システムの下では失いかけていた都市としての諸機能を再び強化するにいたった。そして、今や上海はグローバルな都市間競争に加わることになり、より高次の機能を集積させそれらに従事する階層を形成し定着させるべく、自らの空間を再編しつつあると考えられる。上海万博を契機に都市開発はさらに加速している。

(3) 福建省・福州市・福清市

福清市は福建省の省都である福州市の南 85km に位置し、福州市に属する県レベルの市であり常住人口は 120 万人（2009 年末）である。この福清という地域は、僑郷、すなわち華僑・華人の出身地としてよく知られている。福建省、広東省、海南省から東南アジアを始めとした世界各地に人々が出て行って、華僑や華人と呼ばれるようになったことは周知の通りであるが、「およそ華人のいるところには必ず福清人がいる」という言い方

もされるように、華僑・華人の中でも福清出身者の存在感は特に大きい。

近年の福清は経済発展が著しく生活水準も急速に向上しているが、それには海外へ進出した華僑・華人と故郷の福清を結ぶ移民ネットワークを通じた送金、寄付、投資といった資金の還流が大きな役割を果たしている。出稼ぎ御殿を建てた後でさえ人々はさらに豊かな生活のために再び海外へ出てゆく。グローバル都市地域を研究する際に、このような華僑・華人の移民によって形成されたネットワークを等閑視することはできないだろう。

(4) 広東省・江門市・開平市

広東省開平市は江門市に属する県レベルの市であり、省都広州市から南西へ 110km、江門市からは 46km に位置し、総人口は 68.5 万人（2008 年末）である。珠江デルタ地域の西部にあり、かつては水運を基軸にした港湾都市として栄えた。この地域も僑郷としてよく知られ、海外に 49 万人、香港・マカオに 26 万人余りの開平出身の華僑・華人が居住しているとされる。彼らの祖先が故郷の村に錦を飾るようにして建設した独特の建築様式の住宅は、世界遺産に認定されている。しかしながら、華僑によって蓄積された資本の多くは、近年ではむしろ香港か広州をはじめとする珠江デルタ地域の核心部へ投下されたと考えられる。労働力・人材の動きも同様である。グローバル都市地域の周辺部としてこの地域のありようを理解する必要があるだろう。

(5) 浙江省・温州市

浙江省沿海の都市である温州市は、常住人口が 800 万人（2008 年末）であるが、その 3 分の 1 近くは「新温州人」すなわち中国各地から 1990 年代以降に流入してきた人々である。全市の外来人口は 1987 年の 82,378 人から 2007 年末の 333 万人余りに増加した。一

方、170 万人を超える温州人が中国全国へ、50 万人以上が世界へと活躍の場を広げている。例えば北京のアパレル産業や上海の不動産産業など、各地で温州人が重要な役割を果たしている。こうした流動性の高さがグローバル都市地域の形成とどう関連付けられるのか目下検討中である。

市街地は商業活動が活発であり、不動産開発が至る所で進行している。温州商貿城と呼ばれる地区には、アパレル、電器、雑貨など多様な商品の卸売機能が集積しており、その集積の規模は中国でも一、二を争うほどのものである。「温州モデル」という個人経営を主体とする経済発展パターンを著名な社会学者の費孝通が提唱してからすでに 20 年以上が経過しており、この都市の特異な発展パターンを改めて解釈する必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

① 小野寺 淳、「北京の空間構造と都市計画」、地理 53(6)、28-35、2008 年。査読無

[学会発表] (計 1 件)

① 小野寺 淳、「中国内陸部の地域開発」、東北地理学会研究集会『変容を続ける中国の地域』2009 年 2 月 28 日、仙台。

[図書] (計 7 件)

① 小野寺 淳 (共著)、石原 潤編『変わり行く四川』ナカニシヤ出版、2010 年、総頁数 208 のうち 51-80 および 153-174 を執筆した。

② 小野寺 淳 (共著)、経済地理学会編『経済地理学の成果と課題 第 VII 集』日本経済評論社、2010 年、総頁数 384 のうち 177-181 を執筆した。

③ 小野寺 淳 (共著)、『新世界地理 第 1

巻 アジア I 東アジア』朝倉書店、刊行予定、「新しい住宅景観と開発方式—四合院から高層住宅へ—」を執筆した。

④ 小野寺 淳 (共著)、石原 潤・馬 平・秋山元秀・高橋健太郎編『寧夏回族自治区の経済と文化』奈良大学文学部地理学科、2008 年、総頁数 146 のうち 48-60 を執筆した。

⑤ 小野寺 淳 編著『グローバル化にともなう都市間ネットワークの形成に関する研究 (II)』横浜市立大学国際総合科学部、2007 年、総頁数 64。

⑥ 小野寺 淳 (共著)、石原 潤・石 培基・秋山元秀・小島泰雄編『甘粛省と酒泉オアシスの変容』奈良大学文学部地理学科、2007 年、総頁数 140 のうち 60-73 を執筆した。

⑦ 小野寺 淳 (共著)、矢ヶ崎典隆・加賀美雅弘・古田悦造編『地誌学概論』朝倉書店、2007 年、総頁数 160 のうち 59-68 を執筆した。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小野寺 淳 (ONODERA JUN)

横浜市立大学・大学院都市文化研究科・教授

研究者番号：50292206